

所信表明用紙

二〇二一年度中央委員会常任委員長選挙所信表明用紙

中央常任委員長候補

文学部 二回生

神足 颯人

我々学友会はなぜ存在しているのか。ことに自治会活動において、それを何度も自問した者は少なくないのではないでしょうか。私もそのひとりです。立命館民主主義の創成から時は流れ、大学という場所の門戸は今や大きく開かれました。現代に生まれ現代を生きる私には、学友会は毎年その形を保つことに躍起になっているように思われました。私は疑問に思いました。なぜ、残すことが大切なのだろうか。形だけの組織にいったいどれほどの意味があるのだろうか。自治意識の低下は、理想の学園が醸成されていることの表れだと歓喜すべきではないのか、と。しかし、二〇二〇年という稀有な年は、私の考えを大きく変えてくれました。目に見えぬ敵が人類を翻弄し、我々の日常は奪われました。当たり前前にあると思っていた学園生活は、突如として変容したのです。以前までならキャンパス中に見ることのできた、課外自主活動を楽しむ学生らの輝かしい姿は、もうどこにもありません。尊い「自主」が奪われてしまったのです。仕方ない、本当にその言葉で片付けられることでしょうか。そこでやっと私は気づくのです。この組織を残そうとしてきた方々は、この「いま」のために繋いでくださったのではないだろうか、と。学友会が存在し続けること、それは幾星霜を越えて受け継がれた意志の総体、つまり想いの結晶です。その想いをカタチにするために、私が何ができるだろうか。その答えが、この度の立候補の決意でした。いま動き出さなければ、全学協議会のある今年に動き出さなければ、後進を信じ、想いを託してくださった方々に、合わせる顔ありません。我々には想いをカタチにするための組織が、部署が、担当が、会員が、そして何より、その話し合いの場があるのです。全構成員自治によって成り立つ学友会の中核が、その組織を維持しようと努めるためには、まずは組織に属する団体の声に深く耳を傾けなくてはなりません。学術、学芸、体育の三部部だけではなく、数百を超える登録団体まで守りきってこそその常任委員会です。それができなくては、単なる頭(アマ)にすぎません。リーダーたるもの、自らの価値が何によって生み出され、それをどう行使させて貫うのが正しいかを常に考えなくてはなりません。リーダーは頂点ではなく、全体の臣なのです。全ての意志を預けていただいてこそ、はじめてその頭(かしら)としての価値を有するのです。だからこそ、私は率先して全体のために動けるリーダーを目指します。最後になりますが、学友会の原則が単年度意志決定であるように、組織自体に永遠はありません。しかし、それを永遠にするのは人の想いです。過去があって今の私たちがいるように、これからの未来に繋いでいかななくてはなりません。「想いをカタチに学友会」。この想いの続く限り、我々は不滅です。

二〇二〇年一月二十二日

立命館大学学友会中央常任委員会

同選挙管理委員会